

○議長（中村 敦君） 次は、質問順位 5 番、一つ、下田市の広報、プロモーション力強化について。

以上 1 件について、11 番 鈴木 孝君。

〔11 番 鈴木 孝君登壇〕

○11 番（鈴木 孝君） 公明の鈴木 孝でございます。議長の通告に従い、趣旨質問をさせていただきます。

下田市の広報、プロモーション強化について伺います。

令和 3 年 3 月、第 5 次下田市総合計画の中で、まちの将来像として、時代の流れを力に・つながる下田・新しい未来の 3 点が示されました。総合計画の中でまちの将来像として示されたこの 3 点の内容を今読み上げて確認したいと思います。

まず、時代の流れを力に。これは、今までの時代と新しい時代の流れを力にする。都会から地方へ、地方から世界へという新しい地方の時代へ。急速に進展する情報通信技術の活用。地方の有する豊かな空間性等の強みや可能性を最大限に駆使する。

次に、つながる下田では、関係人口の創出・拡大。人と地域の絆の強化。賀茂・伊豆圏域の市町との連携。市民と多様な主体（民間企業、大学、NPO 等）が下田で協働。

続きまして、新しい未来では、新たな暮らしのスタイルの確立や、新たな付加価値を生み出す消費・投資の促進など、これまでにない新しい価値を創出し、明るく希望の持てる未来を築くという内容が示されております。

今、読み上げました、まちの将来像は、移住、定住、観光、企業誘致などの促進、かつ、また活性化するためのシティプロモーションとして、各事業と関連づけて広報していく必要があると私は考えます。例えば、令和 5 年度の重点施策である新庁舎建設、グローバル C I T Y プロジェクト、広域ごみ処理施設整備などの事業も、このまちの将来像と関連づけることにより、下田市の在り方を示し、シティプロモーションに活用できると考えております。

新庁舎等建設では、旧稲生沢中学校を有効活用して建設計画が進められております。まだ活用できる建物を市庁舎としてリノベーションすることは、解体による廃材の発生を最小限に抑えることにもなり、持続可能な社会を目指す新しい時代の流れにつながっていくと感じます。

移住し、空き家をリノベーションして住居することや、使われなくなった施設をリノベーションして利用する企業とのつながりに発展することが期待されます。

グローバル C I T Y プロジェクトは、事業を通じて地域を愛し、人との絆を強化すること

につながり、都会から地方へ、地方から世界へという新しい地方の時代への変革をもたらすことが期待されます。

また、広域ごみ処理施設整備を通し、賀茂伊豆地域の市町との連携を強め、ごみを減らす工夫が新たな暮らしのスタイルの確立にもつながっていくと思います。

意識をして下田市の思い、まちの将来像、どこへ向かうための事業かを分かりやすく、地域及び全国、海外まで伝えることが必要と感じます。

広報に関しては、各自治体でいろいろと工夫、研究を重ねながら進めているようですが、静岡県内では、磐田市の進め方が先進事例として参考になると思いました。磐田市では、広報広聴・プロモーション課を設け、インスタグラム、フェイスブックの公式ページに加え、動画の公式チャンネルも使い、広報を進めているのが特徴であります。下田市は、磐田市と比べ、職員の人数も違うので、できることできないことあると思いますが、少しずつでも参考にして、できることから進めていくことが大事だと思います。

私の提案としては以上のことが上げられますが、この提案も含め、下田市の今後の広報、シティプロモーションをどのように進めていくのかということを伺いたいと思います。

以上で、趣旨質問を終わります。

○議長（中村 敦君） 当局の答弁を求めます。

市長。

○市長（松木正一郎君） 現在、ソーシャルメディア、いわゆるSNSの上で様々なまちのブランディングですとか、そのブランディングを増幅させて、映像だとかにして見せて、それでもって質を高めるというんでしょうか。そして結果的には、定住だとか観光につなげると、こうしたことについていろんなところでいろんなことやってますよ。下田市もせっかくこんなふうにいっぱいやってるんだったら、もっとやったらいかがですかと、こういうふうな御提案だと思います。

御指摘のとおり、磐田市などいろいろ工夫しているまちがたくさんございます。下田市も、実はこれでも結構努力しておりまして、市民の中で、こういうふうにしたほうがいいよという人たちがいらっちゃって、そういった人たちの話、例えば、具体的にちょっと一つ言うと、スマホを母親は子供を抱えたまま見てるんだと。だから、片手で操作できるように、下田市のいろんなSNS上の発信をしてほしいとか。やっぱり子育て世代とかは、市の情報をすごく必要とされている方がいらっちゃって、そういう人たちが、これでぜひというふうに言われて、それではと言っても、私たちのほうではそんなに得意な人がそれほどいるわけじゃない

ので、そういう人たちそのものをホームページづくりの仲間となってもらって、具体的に若いセンスでやってもらったりしています。ですから、そういった具体策について、後ほど企画の課長等からいろいろと各種施策について申し上げますけれども、ちょっと私が1点だけ心配してるのは、アテンションエコノミーという言葉があるんですけど、アテンション、つまり気を引く、気を引くことでお金をもうけるという人たちがたくさんいて、こういう人たちは、多くの相当曲解したような情報を出して、ちょっと何ていうんでしょうか、とにかくアテンションを引けるということを最大の目標としてるために、その事実を若干曲げながらもやってるというところがあります。こうした情報が社会の中で相当の数、浮遊していて、その中で私たちが刺激的なそういったものとは別に、ちゃんと品格があり、かつしっかりとそのニーズに合った発信をするというのは、非常に難しいなというふうに思っております。言ってみれば、今、情報の出し方、行政からの広報というものが一つの岐路に立っている、立たされているというふうに感じているところです。

最近、新聞報道でにぎわっているチャットGPT等の生成AI、いわゆる超ハイテクノロジーの人工知能がどんどん増幅している中で、実際として、いかに正しく、適正な情報を、適時出していくかということについて、これから庁内一丸となって検討して、それで進めてまいりたいと思います。個別事象について、担当各課長から申し上げます。

以上でございます。

○議長（中村 敦君） 企画課長。

○企画課長（鈴木浩之君） 今、鈴木議員のほうからございました、最近、特に広報に力を入れている市町村においては、シティプロモーションということで、まちを売る、まちをPRするという視点で取り組まれている市町村が増えてきているというふうに感じております。

ただ、現状、下田市におきましては、どちらかというと今までの従来型の広報と観光プロモーションという、そういう2本立てで進めてきたような経過もございますので、まず一旦、そちらの現状についてお話をさせていただこうというふうに思います。

広報につきましては、どうしても行政情報の発信というところが中心となってきております。また、その手法も、広報誌ですとか回覧の発行等、紙媒体をどちらかというと中心に進めてきた経過がございます。近年は、若い方に限らず広い世代でスマホ等から情報を得る方が多くなりまして、SNSでの情報発信が非常に大きな割合を占める、そういう時代となってきたかなというふうに感じております。

下田市におきましても、従来の広報、回覧に加えまして、ホームページの運用を強化して

いるところでございます。また、さらにこれに加えて、近年ではメールの発信ですとか、フェイスブック、インスタグラム、ユーチューブ等も活用して、SNSへの対応を進めているところでございます。

この中で昨年度、先ほど市長のほうからもありましたけども、ホームページのリニューアルということで、メインとしましてはスマートフォンへの対応ということで、そちらの機能強化を図ったところでございます。また、これと併せまして、ホームページのデザイン変更ということで、移住ですとか、ふるさと納税など、市が今、推している事業を前面に押し出した形でページデザインを行ってきた経過もございます。その際には、先ほどありましたように、市民の方の御参加もいただいて、市の職員だけではなく、いろんな方の御意見の中で、ホームページの改修にも取り組んだ。そんな成果もちょっと上げているところでございます。

現在、広報の担当につきましては、なかなか職員の数の制限もございまして、1名が中心となって、庁内連携という形で情報発信を進めているところでございます。特に、SNSに関しましては、TPOといいますか、時間、場所、タイミング、そうしたものが大事ということがございますけども、なかなか情報のセキュリティーの問題ですとか、情報管理の問題もありまして、誰でもできるという環境にはちょっと難しいところがございます。そうした中で今後職員の研修等を充実させまして、広く情報がアップできるようなチームづくりを、庁内でも検討していきたいというふうに考えております。

もう一点、先ほど御提案ありましたけども、単純に行政情報の発信ということではなく、せっかく市が今取り組んでいる様々な主要事業、下田市いろんな事業が大きく動いてますので、そうした事業を生かした形でシティプロモーションという視点を取り入れて、広報を組み立てていきたいというふうに考えております。

以上でございます。

○議長（中村 敦君） 観光交流課長。

○観光交流課長（佐々木豊仁君） 私からは、観光プロモーションについてお答え申し上げます。

観光交流課としましては、市公式フェイスブック、インスタグラム、ホームページを活用し、年間イベントに応じ、随時情報を更新しております。あわせて、下田市観光協会から各種観光プロモーションを実施しており、直近では、人気番組の中で現在開催中のあじさい祭が取り上げられ、その後の問合せ件数が多くなったことから、プロモーションの充実は、観光の誘客に必須であると改めて認識しているところでございます。

また、観光交流課独自の取組としましては、下田市ロケーションサービスとして、フェイスブック、インスタグラムで情報を発信しております。具体的には、ロケ地や撮影内容の紹介、撮影風景等を発信しており、ロケ誘致はもとより、ロケツーリズムを充実することを目的に行っており、近年の下田市内でのロケ支援件数の増加につながっております。

今後も、現在進めている情報発信を継続しつつ、先進事例の取組を参考にしながら、効果的な情報発信に努めてまいります。

私からは以上でございます。

○議長（中村 敦君） 11番 鈴木 孝君。

○11番（鈴木 孝君） ありがとうございます。

まず、市長がちょっと懸念されていると言った、アテンションエコノミーということをも懸念されているんですが、私が思うのは、過度にプロモーションだけを強調するということではなく、せっかくまちの将来像とか、そういう理念があるんであるので、その事業と理念がどこかで、心の潜在意識かどうか分からないんですけど、奥底では市長がやろうとしてるまちの在り方というものがあると思うんですけども、それが、シティプロモーションというか、公に伝わっていないという現状を変えるために、もう少し意識したらどうかということなんです。意識して伝えようとしないと、自分の中では分かっていたり、また、分かる人は分かっていると思うんですけども、それがなかなか伝わらなくて、こんなことやってもしようのかなとか、お金の無駄じゃないかとか、やる必要があるのかという議論になってしまいうんですけども、やっぱり何のためにやるのかというところを、しっかりとまちの将来像等を含めて、理念と合わせて発信していくということが非常に大切だと思うんですね。

観光ということでシティプロモーションしてるということも分かるんですけども、観光をシティプロモーションするのは、例えば、企業でいえば、何か商品を、これがおいしいよとか、これは性能がいいよと言っているようなもので、その背景には、どういうつもりでこの商品を作っているのかという、そこを表さなければいけないと思うんですね。企業もそういうことでいろいろどういう、私たちはどういう企業なんですということをうたうことが、だんだんと今多くなってるんですが、あんまり、例えば、SDGsをうたって、無理やりSDGsをネタにして、その企業イメージを高めようという、そんなことではなくて、とにかく今考えていることが、まだまだ市民はもちろん下田市以外の人に伝わっていないという状況を変えるためにどうするかということなんです。今までやってることはもちろんいいんですけども、もう一つやり方を意識してやることが大切で、そのためにはやっぱり今の時代はS

NSの中でも動画というものが非常に伝える情報が多いということで、文章で表すよさもあるんですけども、動画というと、例えば、声の質や顔の表情、身ぶり手ぶりも含めて、熱い思いを伝えることができるということで、やっぱりこの動画というものは意識して自分たちで発信していかなければいけないんじゃないかと思うんですね。

ただ、ホームページを見てくださいとなったときに、ホームページを見ると、そこに書類みたいなものが貼りつけてあるんですけども、その書類を、例えば、書類は書類でいいんですけども、そこを見ながら口で熱く説明するだけでも、同じことを言ってるんですけども、伝わることもあって、特に、若い世代に伝えるには、動画というものは非常に有効であると。この政治離れだったりすることも解決するためには、若い人たちが気軽にQRコード等で、スマホで見れるような状況を意識的につくっていくべきではないかと思いますが、それについていかがでしょうか。

○議長（中村 敦君） 市長。

○市長（松木正一郎君） 今、非常に重要な御示唆をいただいたというふうに感じています。

今、鈴木議員がおっしゃったように、今やってることそのものは分かるでしょうけれども、その大もとにある理念とか哲学といったものについても、言ったほうがより市民の理解が深まるでしょうということを、本当に改めてそのとおりだなと実感したところでございます。

新庁舎についても、先ほど議員の質問の中でもございましたが、新庁舎を、今ある建物を活用して造りますという、そういったメッセージは、今あるものを使うというのはどういうことなのかというと、コスト縮減はもちろんなんだけれども、地域の文化をちゃんと継承していこうと。みんなでこれを未来に残そうじゃないかという、こういうメッセージになっている。あるいは、そのSDGsということを考えれば、なるべく廃棄物を出さないような工夫をしようということにもなるわけですね。スクラップアンドビルドというのは、昔、普通に言われていて、どんどん古いのを壊して、どんどん新しいのを、現代的でおしゃれなものを造るという時代があったんですけども、これからは違うんだというような発信の仕方が必要だなとしみじみ思いました。

またもう一つ、やはり伝えるのであれば分かりやすく、あるいは心に響くようにうまく工夫しなければならない。これは私自身が長いこれまでの仕事の中で、常に実は心がけていたことで、文字は1文字でも減らすようにと、なるべくビジュアルにしよう、文字は、できればコピーのような形にして、さっきのじゃないけどアテンションをちゃんと引っ張るように、読みたくなるような行政情報の発信ということがやはり重要だろうと思います。まず、最初

の画面でもって、おっとなって、そして、読み終わった後は、自分が一つ賢くなったような気がするぐらい分かりやすいんだけど深い、そういった情報の出し方というのを、現在までもずっと心がけていたつもりなんですけれども、これからより一層、市役所一丸となってやってまいりたいと思います。

以上でございます。

○議長（中村 敦君） 11番 鈴木 孝君。

○11番（鈴木 孝君） ありがとうございます。

子育て支援とか移住支援というのも非常に大切なんですけれども、僕なんかも割と支援合戦みたいなのは好きじゃないんで、市長もどちらかというと支援のし合い、ほかの自治体と比べて、どこが支援が多いなんていうのがあんまり好きじゃないんじゃないかなと思うんですけど、やっぱり市長の理念からすると、やっぱり理念をどれだけ伝えるかというところで、どういうところに向かって行こうかと言ってるところを強調することによって、そういう人たちが集まる、チャレンジするという気持ちを伝えることによって、チャレンジしようという方々が集まってくるような、そういうことが起きてくるんじゃないかと思うんですね。今あるものを勇気を出して壊して、壊すものは壊して、使えるものを使って、また新しいものをつくり上げていこうというそのチャレンジ精神みたいなものが伝わっていくと、そういう方たちが集まって、未来が明るくなるということだと思うんですけれども、これ一般質問で私も当局のほうにいろいろこうしたらどうかとか、いろいろやってほしいということを考えてたんですけれども、自分も議員として、例えば、議会だよりとか、そういうものの中に動画で説明していくとか、いろいろやれることがあるんじゃないかということが気づきました。ですので、私も含めてどこまでできるかという、不慣れなところもあるんですけれども、動画をまず自分たちで取り入れることができるのであればやってみようとか、できることを素人なりに、上手なユーチューバーみたいなことはできないんですけれども、まずやってみて、やっていくうちにだんだん上手になってくるかもしれないし、それを見て、ほかの人たちも自分だったらもっと面白くできるなとか、上手にできるなというのはあると思いますので、まず議員もどうにかして動画を撮ってみるとか、そういうチャレンジをしていきたいと思いますので、一緒になってまた頑張っていきたいと思います。

以上でございます。

○議長（中村 敦君） これをもって、11番 鈴木 孝君の一般質問を終わります。